

# 日本の創作ミュージカルの新潮流としての 2.5 次元 ミュージカルに関する一考察 ～その展開とカテゴリー形成をめぐって

A preliminary study on the Japanese 2.5-dimensional musical from the viewpoint  
of evolution and establishment of the newly-categorized trend model

---

増山賢治

MASUYAMA Kenji

The animated musical, i.e. a ‘musical’ adaptation from the original story by the animated cartoon, the comic book or the game software, which has been produced for some time before, and recently began to be called 2.5-dimensional musical.

This paper aims to survey the 2.5-dimensional musical as a new phenomenon in the musical genre and to discuss the characteristic elements of 2.5-dimensional musical number and the effects on the entertainment genres such as the theatrical world, the world of popular music (J-Pop) and film (including TV) arts.

What’s the difference between the 2.5-dimensional musical and the authentic musical? How can the 2.5-dimensional musical shows bring the originality into the musical style? Concerning the contents, it certainly has the tendency to seek the originality and the diversity in its casting, especially its music, which is quite different from the equivalent produced by the major productions, the famous theatres or the troupes.

The cast and staff of the 2.5-dimensional musical mostly have the wide range of activity in the field of performing arts such as J-Pop musicians, composers, movie and/or stage-actors, dancers, and choreographers at the top level respectively, in this sense they should be called “cross-over artist”.

Possibly through the wide range of their activity and participation in the various genres of entertainment, they bring a certain transformation into the J-Pop, the straight/ ‘musical’ plays and the film arts. Therefore the evolution of the 2.5 dimensional musical could even result in the interaction between the genres as the J-pop, the movie and the musical itself.

キーワード：2.5次元ミュージカル 2.5 dimensional musical

クロスオーバーアーティスト cross-over artist

新しく分類化される流行モデル newly-categorized trend model

## はじめに

本稿は三篇の拙著「J-Pop をめぐるクロスオーバー現象とその周辺の事象についてークラシック、伝統邦楽、ミュージカルとの関係を中心にー」(2011)、「J-Pop および日本の舞台・映像芸術の若手エンタテイナーの活動に見るクロスオーバーの諸相」(2011)、「点描アニメミュージカルの世界」(2012) で得た成果を踏まえて、その続編として書かれたものである。前二篇は音楽・演劇・映像のクロスオーバー現象という視点からアニメミュージカルをとらえ、後一篇は執筆時点においてそれがミュージカル界で新しい潮流を形成する可能性を示唆したものである。そして、その結論から本稿に関連するものを要約すると下記ようになる。

- (1) 創作ミュージカル特にアニメミュージカル制作の活況に伴い、J-Pop ミュージシャンがミュージカルへ進出し、若手演劇俳優はミュージカル、さらに J-Pop に積極的に関与し始めている。
- (2) アニメミュージカルの多くの作品には共通のキャストとスタッフが関わっており、そのキャストの特色は従来のミュージカルの専門俳優ではないが、演劇、映画、ダンス各分野における有望な人材が集められ、作曲、作詞、振付などの制作スタッフも固定化されつつある。
- (3) 多くのアニメミュージカルの演目は、千秋楽公演のライブビューイングを全国の映画館で実施することが恒例化しており、DVD ソフトも多く発行されている。

アニメミュージカルは、主要メディア（テレビ、芸能雑誌など）での取り扱いが少ないため、従来のミュージカルに比して一般的な認知度、注目度は高いとはいえないが、実際は時々刻々と新作が生み出されて公演が行われており、そしてそれは最近 2.5 次元ミュージカルと改称されるなど、ここ数年で急速な発展・変化を遂げている。そこで本稿では 2.5 次元ミュージカルの主として音楽的側面にスポットを当て、その上演状況や映像資料の出版など関連情報を整理して、ここ数年の変化を概観することによって、その音楽の在り方や音楽様式の特徴を知るための礎としたいと考える。

## 1 創作ミュージカルの一カテゴリーとしての 2.5 次元ミュージカル

2.5 次元ミュージカルに関連した近年の最も注目される動向は、一般社団法人 2.5 次元ミュージカル協会の設立である（2014 年 3 月 23 日に協会設立記者発表が行われた）。協会の HP<sup>注1</sup> にその定義として「2 次元で描かれた漫画・アニメ・ゲームなどの世界を舞台コンテンツとしてショー化したものの総称。」と記されているが、実質的には「アニメミュージカル」を改称したものと考えてよさそうである。同協会の HP では公演の最新情報が随時更新されることはもちろん、それらは過去の公演とも合わせて 2.5 次元ミュージカルタイトルとしてまとめられており、その 11 月末の情報を引用すると次のようになる。

- (1) デスノート The Musical、(2) ライブ・スペクタクル「NARUTO-ナルト-」、(3) ミュージカル「美少女セーラーMoon」、(4) ミュージカル『テニスの王子様』、(5) 舞台『弱虫ペダル』箱根学園篇～野獣覚醒～、(6) ミュージカル「忍たま乱太郎」第6弾～凶悪なる幻影！～、(7) 手塚治虫原作「ルードヴィヒ・B」～ベートーヴェン歓喜のうた～、(8) 舞台「私のホストちゃん～血闘！福岡中洲編～」、(9) 舞台『一週間フレンズ』、(10) 『ヴァンパイア騎士（ナイト）』Supported by 青山メインランド、(11) ミュージカル『薄桜記』藤堂平助編、(12) ミュージカル『SAMURAI 7』、(13) 舞台版『心霊探偵八雲 祈りの柩』、(14) りぼん60周年記念公演『こどものおもちゃ』、(15) ミュージカル『AKB49～恋愛禁止条例～』、(16) 超歌劇『幕末Rock』、(17) THE STAGE 舞台『K』、(18) ミュージカル「黒執事」～地に燃えるリコリス～、(19) ミュージカル『虹のプレリュード』、(20) 曇天に笑う

以上20演目があるが、意外なことに協会のHPにおいてもその音楽の独自性、方向性については触れられている箇所はほとんど見られない。そこで、アニメ・コミック・ゲームの舞台化を創作ミュージカルの一カテゴリーとしてとらえるには、音楽様式の面から見て、それらの演目に如何なる共通点が見られるかを解明すべく、更なる広範な調査が必要と考え、その準備作業として2.5次元ミュージカルの代表的な演目を音楽に着目して以下に概観する。

## 2 2.5次元ミュージカルおよび関連創作ミュージカル諸演目の上演状況

まず、拙稿（2011、2012）で扱った2.5次元ミュージカルの代表的演目、次にその新作演目、それに続いて2.5次元ミュージカルに関連すると思われる創作ミュージカルの演目それぞれの動向を、同方面の専門雑誌<sup>註2</sup>から得られる情報（紹介記事や批評）をもとに、DVD化の状況も合わせて概観する。具体的には、既発表の拙稿で言及した演目の中から、その後再演されているものを中心に据え、その後再演されていないものについても未言及の事項を補足しながら、各主要演目別の近年における状況変化について音楽を中心に述べる。

### (1) 「テニスの王子様」

2.5次元ミュージカルの代表格ともいべきミュージカルテニスの王子様、通称「テニミュ」における近年の顕著な変化はキャストの大幅な交替であろう。その詳細は公式HP（<http://www.tennimu.com/>）に記されており、最新情報として3rdシーズンのキャスティングが公表されている。同シーズンの公演日程は東京プレビュー（2015年2月13日～15日、TOKYO DOME CITY HALL）を皮切りに台湾（2015年2月28日～3月1日、親子劇場）、香港（2015年3月7日～8日、賽馬会総芸館）といった海外公演を含め、国内主要都市（福岡、仙台、愛知、大阪）の各公演を経て、東京凱旋公演（2015年5月9日～17日、TOKYO DOME CITY HALL）までが予定されている。公演日程の長期化もさることながら、海外発信に向けての積極的な取り組みの一環として香港・台湾公演の実施は注目に値する。

そして出版、上演活動では主要楽曲のシングルCDリリースの継続にとどまらず、恒例のライブ「ドリライ」のほかにキャスト交替に際してMUSICAL THE PRINCE OF TENNIS CONCERTと銘打ったイベント「Seigaku Farewell Party」が催されたことが目を引く。このように各方面の活動の活発化によって、2.5次元ミュージカルの看板演目としてのみならず、ミュージカル界全体から見ても

無視できない確固とした存在感を示したと言えよう。そのイベントのために用意されたと思われる「GoodBye Today」(作詩：三ツ矢雄二、作曲：佐橋俊彦)に関して、2ndシーズンの青学 vs 不動峰の公演(2011年1月5日~16日、東京JCBホール、1月19日~23日、大阪メルパルクホール、1月26日~2月11日、日本青年館大ホール)プログラムに掲載された制作者たちによる挨拶文の中で佐橋俊彦が「音楽的にも新たなアレンジを施し、リニューアルしたサウンドと共にさらにパワー溢れる舞台をお届けします。」と書いていることから、音楽的にも変化工夫を求めていく姿勢が伺える。

## (2)「忍たま乱太郎」

児子騷兵衛著作の漫画「落第忍者乱太郎」とそれを原作とし制作されたアニメ「忍たま乱太郎」(NHK Eテレ)をミュージカル化した作品で、「ミュンたま」「忍ミュ」という略称も行われている。2010年1月から公演を開始し、現在まで毎年冬期に初演、夏期に再演の年二作品のペースで公演中だが、テレビアニメと異なり、メインキャラクターは忍術学園の六年生で、ギャグや殺陣・アクション等、原作の世界感を活かしたオリジナルストーリーで展開されている。この演目も「テニミュ」同様に、キャストिंगの変化が比較的頻繁に見られるのが特徴的である。演目としてはアクションが売りとなっているが、各公演で音楽、楽曲も入れ替えられ、その中で最近の比較的大きな変化と言えるのが当初から長期に渡ってミュージカルのエンディングテーマ曲として使用されて来た「勇気100%」の扱いである。同曲は第5弾公演で使用されなくなったと思われるが、同名の映画作品では引き続きエンディングテーマとして使用されており、アニメではオープニングテーマ曲として象徴的存在となっていたことを考えると、ミュージカルとしての独立性、すなわちアニメのイメージからの脱却を示唆しているのではないかと推測される。

これまでの公演状況、キャストの変遷の詳細は公式HP(<http://www.musical-nintama.com/> 参照日時2014年11月3日)に譲るとして、拙稿で示した初演から第3弾以降の展開をサブタイトルと公演日程で次に記す。

第3弾再演～山賊砦に潜入せよ～2012年7月4日~7月15日(全15公演)+追加2公演  
東京ドームシティシアターGロッソ

第4弾～最恐計画を暴き出せ!!～2013年1月9日~1月20日(全17公演) サンシャイン劇場

第4弾再演～最恐計画を暴き出せ!!～2013年6月21日~7月7日(全21公演) 東京ドームシティシアターGロッソ

第5弾～新たなる敵!～2014年1月8日~24日(全21公演) サンシャイン劇場

第5弾再演～新たなる敵!～2014年6月20日~7月6日(全21公演) 東京ドームシティシアターGロッソ

第6弾～凶悪なる幻影!～2015年1月9日~23日(全19公演、1月13日、19日休演日)

サンシャイン劇場 作曲・歌唱指導はYOSHIZUMI。

テニミュとの相違点は作曲家の交替(富貴晴美→YOSHIZUMI)のほか、一部の公演でキャストの一部にいわゆるミュージカルの基本的な発声(ベルティングボイス)を操る俳優が出演しているのも本演目の特徴の1つと言えるだろう。例えば、タソガレドキ城城主の黄昏甚兵衛役で特別出演している下村尊則は劇団四季の出身者である。第5弾公演とその再演で作曲歌唱指導は同一人物であるのに、楽曲に大幅な入れ替えが行われ、短いスパンでの楽曲の入れ替えも他の演目には見ら

れない注目点といえるだろう。ちなみに第5弾では同シリーズ初の千秋楽ライブビューイングが行われている。

「忍たま第5弾」(プログラムより)より  
「絆」 六年生・四年生・一年生  
「Jump&Catch ～夢を追いかけて～」 四年生  
「忍術修行の唄」 一年生・土井半助・山田伝蔵・学園長先生・くの一  
「五車の術」 六年生・くの一  
「可能性は無限大」 黄昏甚兵衛  
「先輩の気持ち」 六年生  
「やる気はあるけれど・・・」 一年生  
「バンザイ! ドクタケ」 ドクタケオールスターズ  
「艶姿三人娘」 ナ・イ・ショ♡  
「あなたのためなら・・・」 黄昏甚兵衛  
「ごめんね、コーちゃん」 善法寺伊作・クノー  
「心が揺れる」 黄昏甚兵衛・学園長先生・忍術学園全員  
「忍者はガッツ! 2014」 忍たまファミリー

「忍たま第5弾再演」(プログラム pp.34-35 より)  
「タソガレドキ」 雑渡昆奈門 (この曲のみ作曲は馬飼野康二)  
「ココロ! ヤイバ!」 六年生  
「Midnight Fight」 潮江文次郎、立花仙蔵、中在家長次、七松小平太、食満留三郎&四年生  
「あばよ負け組のブルース」 ドクタケ忍者隊  
「世界は我が百貨店」 黄昏甚兵衛  
「しのびのたしなみ」 ナイショ♡  
「Tango コーちゃん」 善法寺伊作&くの一  
「風よ教えて」 平滝夜叉丸、田村三木エ門  
「はこべはこべ」 一年生&くの一  
「風よ伝えて」 潮江文次郎、食満留三郎  
「HOLE IN ONE」 綾部喜八郎  
「おそばに・・・あなたに」 黄昏甚兵衛  
「風よ吹くがいい」 六年生&四年生&一年生  
「忍者はガッツ 2014」 忍たまファミリー

DVDは第5弾までが出版されており、テニミュに比肩するプレミアがついた高額のものも多く、人気の根強さが伺える<sup>注3</sup>。

### (3) 「エアギア」

この演目は2010年の再演以降、前記の二演目のような上演の継続性は見られないが、2010年版では楽曲に若干の異同が見られ、以下DVDからそれらを書き写す。

M-1 『小鳥丸見参!』、M-2 『空へ』、M-3 『時の支配者 (アイオーン・クロック)』、M-4 『YOU'RE UNDER ARREST(Act1)』、M-5 『月光の輪舞曲 (ロンド)』、M-6 『世界は我が手中』、M-7 『YO! YO! シャベって YO!』、M-8 『サマー・ナイツ・ドリーム』、M-9 『月光の輪舞曲 (ロンド) II～小鳥丸見参II』、M-10 『YOU'RE UNDER ARREST(Act2)』、M-11 『心の鎖』、M-12 『空へII』、M-13 『BATTLE』、M-14 『決着』、M-15 『空へIII』、M-16 『小鳥丸見参!』

前半に新たに挿入された M6 「世界は我が手中」は、導きのロミオ役の上山竜司の歌唱力が活かされている曲調に仕上がっており<sup>注4</sup>、後半では M11 「心の鎖」(前回公演の「いつか見た空」に代えて) が用いられ、また M5M9 の「月光の円舞曲」では元来ユニゾン主体から二声、三声を採用する箇所が増えるなど着実に成長の跡が伺える。そして、キャストイングにも一部変化が見られる。再演と再再演で鱈島海人役(初演では役自体が未登場)の湯沢幸一郎は 2.5 次元ミュージカルでは「DEAR BOYS」や「聖闘士星矢」などの人気作への出演のほか、自らが脚本・演出・音楽を担当した「マグダラなマリア」(後述)を上演し、主役として出演している。再再演のアaron・クロック役の斎藤ヤスカは「テニミュ」(平古場凍役)や「マグダラなマリア」(クララ役)などに、そして再演のアキト・アギト役から再再演では歓びのジュリエットへと役を交替した永嶋柊吾は「マグダラなマリア」でハンス役を務めるなど、皆 2.5 次元ミュージカル、特に「マグダラなマリア」への出演歴が共通している点が興味深い。その他で注目すべきなのは、初演および再再演で主役のイッキ役を務めた鎌刈健太と、三公演ともハムレット役を演じた米原幸佑が音楽活動としてロックバンドの「ココア男。」に参画している点である。

#### (4) 「黒執事」

初演以来現在までに四回の公演が行われている。初演と再演については既出の拙稿で述べたので省略し、再再演と最近の公演について述べる。東京と大阪で行われた再再演(2013年5月17日～26日、赤坂 ACT シアター、6月8～9日、梅田芸術劇場)はストーリーもサブタイトル(「千の魂と堕ちた死神」)も再演と同じであるが、キャストイングは、主役のミカエリスの松下優也と葬儀屋役の和泉宗兵、死神役のソトクリフの植原卓也以外は大幅に入れ替わった。植原は「テニミュ」の出演歴があるが、ミュージカルや音楽活動歴に関しては、新加入のメンバーの特にエリック・スリングビー役の良知真次、アラン・ハンフリーズ役の中河内雅貴が注目に値する。良知に関してはプログラム冊子の紹介文の示すごとく、舞台の主な出演作として『GLORY DAYS』『屋根の上のヴァイオリン弾き』『アトム』『タンブリング vol.1&2』『ALTER BOYS』『ロミオ&ジュリエット』『スリル・ミー』『ウィズ～オズの魔法使い～』が挙げられ、まさに「近年は数々のミュージカルでその実力を発揮している。」と言える。さらに、音楽活動としては 2011 年に植木豪(PaniCrew)と「AURIBE」を結成してメジャーデビューを果たしていることも記されている<sup>注5</sup>。中河内に関しては「ダンサー、アーティストとして舞台や映像分野で目覚ましい活躍をみせている。」とあり、出演作として『ALTER BOYS』『銀河英雄伝説』『BONNIE&CLYDE』『SAMURAI7』『中河内雅貴ワンマンショー～ある男に関するレシピ集～』『地獄のオルフェウス』が、音楽活動ではアコースティックライブ、映画については「2STEPS!」「死ガ二人ヲワカツマデ・・・」「アルカナ」が挙げられている。この二人以外でも、ロナルド・ノックス役の井出卓也は、映像や舞台出演のほかに近年は前述の「エアギア」の主演者、鎌刈健太らと「ココア男。」のメンバーとしても活動し、そして現在はソロで音楽活動も展開中である。ウィリアム・T・スピアーズ役のテルマも「テニミュ」の乾貞治役での活躍が記憶に新しい。バルドロイ役の鷲尾昇は「近年は音楽活動も並行しており、ボーカル&作詞としてラ

イブを行うほか CD もリリース。」と書かれている。フィニアン役の河原田巧也もテニミュの 1st シーズンで遠山金太郎役を務めているなど前回の公演に比べてミュージカル出演や音楽活動経験の豊富な人材を揃えたという印象を受ける。ただし、作曲は岩崎啄が担当し、使用楽曲に基本的に変化は見られない。

さらに、本演目は新作の上演（サブタイトルは「地に燃えるリコリス」）が行われており（2014 年 9 月 5 日～23 日、六本木ブルーシアター、10 月 2～5 日、梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ）、主演のセバスチャンと数人の助演以外はキャスティングに異同が見られ、本演目も他と同様に千秋楽ライブビューイングが実施されている。新登場でキャストの中で歌とダンスの上手さで特筆すべきは宝塚出身の AKANE LIV であるが、同じく松下優也もミュージカル出演の経験を着実に積み重ねており、本シリーズも各方面でのレベルアップが感じ取れる。その他、最新作では作曲者が交替し、ミュージカルやテレビドラマの主題歌で活躍中の坂部剛が担当したことが注目される。

#### (5) 最近の注目作

これについては前記のように 2.5 次元ミュージカル協会の公式 HP から情報が得られるが、ここで注目したいのはミュージカルという冠ではなく「音楽劇」、「超歌劇」、「学蘭歌劇」など別呼称の同類演目の出現で、その類には「最遊記歌劇伝」「帝一の国」「幕末 ROCK」「デスノート」「AMNESIA」「ペルソナ」などがあり、中でも「最遊記歌伝」はシリーズ化されて人気作となっていることが伺える。

最遊記歌劇伝 -Go to the West- (2008 年 9 月 13 日 - 21 日)

最遊記歌劇伝 -Dead or Alive- (東京公演：2009 年 3 月 20 日 - 29 日 / 大阪公演：2009 年 4 月 11 日 - 12 日)

最遊記歌劇伝 -God Child- (2014 年 5 月 2 日 - 7 日、全労済ホール/スペースゼロ)

最遊記歌劇伝 -Burial (東京公演：2015 年 1 月 8 日 - 12 日、シアター G ロッソ、大阪公演：1 月 23 日 - 25 日、シアター BRAVA)

その DVD も出されているが、注目されるのはニコニコ動画により生放送配信と千秋楽全景定点映像配信が行われたことで、その他、ミュージカルあるいは歌劇という呼称が用いられていないもの、例えば舞台「弱虫ペダル」、舞台「K」なども含まれており、ますますの拡大の様相を呈している。次にそうした 2.5 次元ミュージカルに関連する創作ミュージカルを見ていく。

#### (6) ニコニコミュージカルとその関連演目

拙稿（2011、2012）で紹介したようにニコニコミュージカルの原作はアニメやコミックではないものも若干含まれているが、近年は 2.5 次元アーティストと称されることが多くなった声優と 2.5 次元ミュージカルに出演歴のある俳優や制作に携わったスタッフで構成されている点がユニークで、本シリーズも継続中である。主演は、ぼこた、蛇足、百花繚乱といった 2.5 次元系アーティストが務め、近年では「5 王子とさすらいの花嫁～ニコニコニーコ due」、「千本桜」などの公演が行われている。

その他、アニメが原作という訳ではないので、厳密に言うと 2.5 次元ミュージカルの範疇ではな

いが、ニコニコと同様にキャストや制作者の多くが共通している点で注目されるのが舞台「マグダラなマリア」のシリーズである。その主役を務めている先述の湯沢幸一郎は、ニコニコミュージカルワークショップ<sup>注6</sup>の担当講師紹介文によると、「俳優 / 劇作家 / 演出家 / カウンターテナーで、『マグダラなマリア』シリーズで作 / 演出 / 作詞作曲 / 写真撮影など一切を手がけ、シリーズは第二弾にして動員数一万を超える人気作品となった」とあり、また「耽美音楽ユニット Caccinica のボーカリストを務める」と記されている。

そして、マグダラの公演データを主催者であるネルケプランニングの公式 HP (<http://www.nelke.co.jp/stage/magdara/index.html>) から関連情報をまとめると下記のようになる。

来日公演『マグダラなマリア』～マリアさんの Mad(Apple)Tea Party～

公演期間：2008年11月12日～16日 シアターアプル

出演者：マリア・マグダレーナ、KENN、市瀬秀和、小林健一（動物電気）、米原幸佑（RUN&GUN）、永嶋終吾、藤原祐規、齋藤ヤスカ、津田健次郎

再来日公演『マグダラなマリア』～マリアさんは二度くらい死ぬ！オリエンタルサンシャイン急行殺人事件～

東京公演・2009年11月18日～23日 サンシャイン劇場

兵庫公演：2009年11月27日・28日 新神戸オリエンタル劇場

出演者：マリア・マグダレーナ、岡田亮輔、鯨井康介、高木万平、高木心平、佐藤永典、広瀬友祐、別紙慶一、小林健一（動物電気）、津田健次郎

日替わりゲスト：井上優、ニーコ、平田裕一郎、高橋広樹、青柳塁斗、永山たかし、Kimeru

来日公演『マグダラなマリア』～マリアさんの夢は夜とかに開く！魔愚墮裸屋、ついに開店～

大阪公演：2010年8月6日～8日 梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ

東京公演：2010年8月12日～22日 サンシャイン劇場

出演者：マリア・マグダレーナ、米原幸佑（RUN&GUN）、藤原祐規、岡田亮輔、佐藤永典、小野田龍之介、太田基裕、豊永利行、小林健一（動物電気）、津田健次郎、酒井敏也

来日公演『マグダラなマリア』～マリアさんの Mad Tea Party(Reprise!)

東京公演：2011年5月25日～29日 サンシャイン劇場

兵庫公演：2011年6月3日～5日 新神戸オリエンタル劇場

出演者：マリア・マグダレーナ、KENN、市瀬秀和、米原幸佑（RUN&GUN）、永嶋終吾、藤原祐規、齋藤ヤスカ、政岡泰志（動物電気）、津田健次郎

来日公演『マグダラなマリア』～魔愚墮裸屋・恋のカラ騒ぎ～

大阪公演：2011年10月8日～10日 梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ

東京公演：2011年10月15日～23日 サンシャイン劇場

出演者：マリア・マグダレーナ、KENN、米原幸佑（RUN&GUN）、藤原祐規、清水良太郎、永山たかし、小林健一（動物電気）、津田健次郎、酒井敏也、岡田浩暉

来日公演『マグダラなマリア』～ワインとタンゴと男と女とワイン～

東京公演：2012年11月21日～30日 サンシャイン劇場

兵庫公演：2012年12月7日～9日 新神戸オリエンタル劇場

出演者：マリア・マグダレーナ、津田健次郎、鯨井康介、別紙慶一、太田基裕、豊永利行、高木稟、進藤学、赤澤燈、藤田玲、小林健一（動物電気）、岡幸二郎



### 3 担い手（主要俳優、制作スタッフ）の概観

ここでは、2.5次元ミュージカルの担い手、すなわち出演者と制作スタッフの活動の多様性、広汎性について述べる。「テニミュ」は若手俳優の登竜門となっていることは演劇の世界ではほぼ「通念」となった感があるが、2.5次元ミュージカルおよびその関連ジャンルの出演者、制作スタッフを、ミュージカル、映像・演劇の分野に進出しているミュージシャン（J-Popでいうところの「アーティスト」）、逆に音楽活動にも積極的な映像・演劇分野の俳優から、さらにミュージカル、演劇、映像に関わるダンサーなどいくつかのケースに分けてその活動範囲の広がりを見て行く。

#### (1) ミュージカル、演劇、映像分野に進出するミュージシャン

いわゆるJ-Popのミュージシャンで、(2.5次元)ミュージカル、演劇、映像分野への進出状況の好例として、まず松下優也は韓国ミュージカル「Dream High」(2012年)、ブロードウェイミュージカル「IN THE HIGHTS」(2014年4月)、舞台「タンブリングFINAL」(2014年6月、7月)、舞台「The ALUCARD SHOW」(2014年11月)というようにミュージカルや舞台への主演、出演が相次いでいる。そして、RUN&GUN(永田彬、宮下雄也、米原幸佑)にも、ユニットおよび個々の活動でミュージカルや演劇の豊富な出演が確認できる。元メンバーの上山竜司は前述のとおり、ミュージカル界に本格的に進出した感がある。それから、原作はアニメではないがミュージカル「絆、少年よ大紙を抱け」など多くのミュージカルや音楽劇に出演しているLeadもその典型的な例である。その他、EMALFも同様の状況が見られ、まさに枚挙に暇がない。

#### (2) 音楽活動を積極的に展開する演劇、映像分野の俳優

鎌川健太は数々の2.5次元ミュージカルや舞台に主演(「オアシスと砂漠」「テニミュ」「エアギア」ほか)するだけでなく、音楽活動にも積極的に関わっており、ココア男。のヴォーカルとしてデビューシングル「甘い罠、苦い嘘、、、」(2010年4月14日)からラストシングル「軌跡～Time to Go～」(2012年3月14日)まで華麗な足跡を残している(ココア男。公式HP→<http://avex.jp/cocoaotoko/index.html>)。「テニミュ」はもとより、近年はオーソドックスなミュージカルへの出演も多い加藤和樹は2006年4月のミュージシャンとしてのデビュー当時からCDリリース、ライブなどミュージシャンとしての活動も積極的である(公式HPのプロフィール→<http://www.avex.jp/kazuki/profile/>)。「テニミュ」「忍たま」ほかに出演した若手俳優集団のD-BOYSから選抜されたメンバーで結成されたD☆DATE(現在のメンバーは4人)は2010年12月「あと1cmのみらい」でメジャーデビューして以来、CD、DVDを積極的にリリースして活躍中であることは、今後、J-Popに新しい影響が生じる可能性も考えられる(<http://mv.avex.jp/d-date/>)。

#### (3) 演劇、ミュージカル、映像、音楽活動に関わるダンサー

その代表格としては中河内雅貴が筆頭に挙げられるだろう。中河内の例に見るまでもなく、上記に挙げたエンタテイナーと同様、もはや関わるすべてのジャンルが専門と言っても過言ではないほ

ど、その歌唱力、演技力はダンサーの域をはるかに超えている。中河内の活躍を紹介した一文「オルフェウスの系譜—中河内雅貴について」（「ユリイカ 9月臨時増刊号第 46 巻第 10 号、通巻 648 号の pp.115-121」では沢田研二や萩原健一の流れを引く存在として語られているが、彼の歌唱力、演技力の高さは往時の沢田や萩原を明らかに凌駕している点からすれば、的外れな印象が否めないところである。その他、ダンスグループの DIAMOND DOGS はパフォーマーとして様々な活動を展開しており、その歌唱力の評価も高く、アーティストとしてメジャーデビューを果たしているだけでなく、広くミュージカルや音楽劇の各種公演で振付を担当している（公式 HP → <http://www.diamonddog-s.com/>）。

#### (4) 音楽活動やミュージカルへ参画する声優

近年、中でも目覚ましい活躍を見せているのが声優出身やニコニコ動画で活躍する「歌い手」、「踊り手」、「ボカロ P」といったエンタテイナーたちの台頭である。すでに以前からミュージシャンとして活動を展開している宮野真守、KENN、ROOT5、蒼井翔太らは、同方面の専門雑誌（『2.5SONG MATE』『UTA ☆ ST @ R』『Trickster』ほか参考資料を参照。）で盛んに取り上げられ人気を博しており、蒼井翔太は俳優として舞台「ペルソナ」で高い評価を受けている<sup>注7</sup>。

その他、上記のエンタテイナーが、2.5次元ミュージカルに止まらず、広く舞台や映像分野で活動を展開している中、ミュージカルへの進出以外でとりわけ注目されるのが地方局やネット TV、そして特撮ヒーロードラマにおける活躍である。近年の特撮ヒーローものではオープニングソング、エンディングソング（特にエンディング曲には登場人物たちによるダンスが配される）に積極的に登用されて、テニミュに出演歴のある伊勢大貴の歌う「列車戦隊トッキュウジャー」、TVK 制作による「戦国鍋 TV」の音楽コーナーなどがその好例である<sup>注8</sup>。

#### (5) 2.5次元ミュージカルの制作スタッフ

ミュージカル制作の要である音楽を担当する作曲家として佐橋俊彦、坂部剛、玉麻尚一、YOSHIZUMI ほか活躍し、テレビドラマの音楽も手掛けている中、何と言っても佐橋俊彦が群を抜いている。そして振付ではテニミュ以外でもミュージカル全般で活躍している人材が多く含まれており、中でも上島雪夫の活躍は目覚ましく、2.5次元ミュージカルのほか、ロックミュージカル「SONG OF SOULS」-慶長幻魔戦記- や映画も制作している（中河内雅貴と古川雄大のダブル主演による「2STEPS」2009年）。そして、オリエンタルロックミュージカルシリーズ「King of the Blue」の公式ブログ（<http://kingofblue.exblog.jp/>）によれば、「上島雪夫演出のもと、実力派俳優陣が繰り広げる。人妖入り交じる大スペクタクル歌劇！」というように演出家が前面に押し出されていることからそれは明らかである。次にその公演状況と概要を同ブログ掲載の情報より一部省略して書き写す。

「King of the Blue」

ル・テアトル銀座 2010年1月23日～1月31日

演出：上島雪夫

原案：木村元子・半澤律子

脚本：半澤律子・岡本貴也

音楽：KYOHEI (Honey L Days)

出演：泉見洋平 鈴木亜美 加藤和樹 大河元気 東山光明 (Honey L Days) 黒木マリナ 柿弘美 穴吹一朗 石井匡人  
Ryohei 貴水博之ほか

「陰陽師～Light and Shadow～」

新国立劇場 中劇場 2011年4月7日～4月17日

脚本：半澤律子

演出・振付：上島雪夫

音楽：KYOHEI (Honey L Days)

出演：泉見洋平 加藤和樹 良知真次 菊池美香 東山光明 (Honey L Days) 細貝圭 澤乃せいら 柿弘美 (劇団クロックガールズ) 吉見一星 柴一平 西川卓 秋月淳司 木下あきら 植木豪 (PaniCrew) 土屋裕一 (\*pnish\*) 小山圭太 平江広宣  
IZAM (ベニバラ兎団) 紫吹淳

「SONG OF SOULS- 慶長幻魔戦記-」

2014年11月7日～16日 KAAT 神奈川劇術劇場 ホール

2014年11月23日24日 梅田劇術劇場シアター・ドラマシティ

出演：泉見洋平 加藤和樹 新垣里沙 東山光明 (Honey L Days) 佐々木喜英 松田凌

企画・主催 メディアミックス・ジャパン

そして、振付と同時に注目すべきなのは音楽とキャストである。泉見洋平はミュージカル界のスター、加藤和樹の活躍は前述のとおりで、東山光明とKYOHEI、すなわち音楽ユニットのHOENYLDAYSが音楽を担当している。それから良知真次、植木豪、さらにはIZAMI<sup>注9</sup>らが関与しており、そこから拙著(2010、2011)で指摘したような音楽・演劇・ミュージカル・映像のクロスオーバー現象が確認できる。

## 結語

2.5次元ミュージカルの出現とその関係者たちの縦横無尽の活躍は、音楽、演劇、映画など大衆文化全般への広範な影響が予想される。そして、彼らが旧来のミュージカル界へ進出し、音楽活動を展開することはミュージカル界、音楽界(J-Pop)への影響、変革へとつながる可能性も秘めていると言えるだろう。

2.5次元ミュージカルのジャンルとしての認知度を高めるための普及に関しては、ライブビューイングの実施が大きな役割を果たしていることはもちろん、それが映画館の存在意義も変える作用を示している点も注目に値する。そして、テレビではローカル局を、そしてネットではニコニコ動画やアメーバスタジオの放送といったニューメディアを活用しながら、その楽曲はカラオケやオリコン進出への積極的な姿勢も覗かせている。実際、2.5次元ミュージカルに出演している俳優・声優は音楽活動でのメジャーデビューを果たしているケースも珍しくなく、楽曲ジャンルのにもヒーローものの主題歌までと多岐にわたっている。その他、2.5次元ミュージカルの扱いに消極的な大

手の報道メディアに対して、それを積極的に伝える雑誌の存在は少数派とは言え、硬直化したメジャーメディアへの「挑戦」という意味において、世界進出を目指す2.5次元ミュージカルの展開に対する強力な後方支援と言えるだろう。

総じて2.5次元ミュージカルの出現、そしてカテゴリー形成の趨勢は、音楽・演劇・映像の自由な融合、人と物の往来、文化における恒常的变化、変革、創造の必然性を明確に提示している点で文化の在り方に重要な一石を投じるものと考えられる。そして、俳優、スタッフとも実力のある人材が登用され、育成されていくことの重要性を合わせて示唆していることが感じ取れる。

---

## 注

注1 <http://www.j25musical.jp/>

注2 中でも『キャストプリゼロ』のキャッチフレーズが「2次元と3次元を繋ぐビジュアルキャストマガジン」となっていることや、最近ではさらに『Stage DASH』が2.5次元エンタテインメントマガジンとして創刊されたことが注目される。参考資料の雑誌類を参照。

注3 2014年11月末の時点で、初演のDVDの新品はアマゾンで30,000円の値がついている。

注4 上山竜司はミュージカル『宝塚 BOYS』やミュージカル『レ・ミゼラブル』への出演によって、その歌唱力の高さは実証されている。

注5 PaniCrewとは1998年結成、2000年デビューのダンスパフォーマンスグループで、植木はメインヴォーカル。

注6 <http://info.nicovideo.jp/nicomu/workshop/>

注7 参考資料の『Trickster vol.13』の「役者 蒼井翔太」pp.22-27を参照。

注8 列車戦隊トッキュウジャーは2014年11月時点で放送継続中。オープニングテーマの作曲は坂部剛。公式HPは→<http://www.tv-asahi.co.jp/tqg/>。戦国鍋TVにはミュージック・トゥナイトという音楽コーナーがあり、若手舞台俳優たちが様々な音楽ユニットを組んで新曲を披露する。公式HP→<http://www.tvk-yokohama.com/sengokunabe-tv/>

注9 ヴィジュアル系バンドのSHAZNAのヴォーカリストで、現在は俳優として活動中。

---

## 参考資料

### 【文字資料】

#### [論文類]

増山賢治「J-Popをめぐるクロスオーバー現象とその周辺の事象についてークラシック、伝統邦楽、ミュージカルとの関係を中心にー」『ミクスト・ミュージック増刊号音楽学論文集』(2011年3月)

増山賢治「J-Pop および日本の舞台・映像芸術の若手エンタテイナーの活動に見るクロスオーバーの諸相」『MIXED MUSES no.6』(2011年3月)

増山賢治「点描アニメミュージカルの世界」『MIXED MUSES no.7』(2012年3月)

#### [雑誌類] (発行年月日順)

『キャストプリゼロ vol.13』ガイドメディア、2010年11月15日

『2.5Song MATE vol.16』FOOL'S MATE、2014年6月20日

『UTA ☆ STAR vol.7』Gakken、2014年7月28日

『ユリイカ』9月臨時増刊号第46巻第10号(通巻648号)、2014年7月31日

『Trickster vol.13』徳間書店、2014年8月15日

『Sparkle vol.19』株式会社メディアブック、2014年9月15日

『Stage DASH! vol.1』(株)主婦と生活社、2014年11月2日

※プログラム類は省略

### 【映像資料】

『エア・ギア vs. BACCHUS Top Gear Remix』MJB D-70965、株式会社マーベラスエンターテインメント、2010年7月15日

『ニコニコ東方見聞録』UPBL-1005/6、(株)ドワンゴ・ミュージックエンタテインメント、2011年4月27日

その他